

# シームレスの時代

## デジタル化

株式会社大風印刷

大風 茂吉



近年印刷業界は、やはり気になることは景気の行方である。長引く不景気の中で、印刷の需要が減少していると共に、デジタル化の急激な発展とともに印刷会社内部の合理化だけでなく、対クライアントとの関係も工程上ますます近くなり、シームレスな関係を保たねば仕事を継続していくことは難しくなってきた。まさに、製作現場の工程変化だけでなく、業態まで変化してきている。いかにその技術の変化に対応して印刷産業の中で生きのこれるかを考えているところである。

印刷は、歴史的には非常に古く、一四五五年に金属活字を使用した印刷技術を発明したドイツのグーテンベルグが四十二行聖書と呼ばれるラテン語聖書二百部を完成した。これが世界初の大量印刷物とされている。美術史的にもゴシック体の傑作と評価されるこの作品は、ドイツ・マインツ市のグーテンベルグ博物館による復刻版の一頁である(写真)。そ

の後、一九七五年代まで延々と続いて来たのである。一九七六年、この年に電算写植が生まれコールドタイプ、すなわち写真植字が大勢を示して来た。「活字よさよなら、コールドよこんにちは」の相言葉で、写真植字に取り組んで来た。

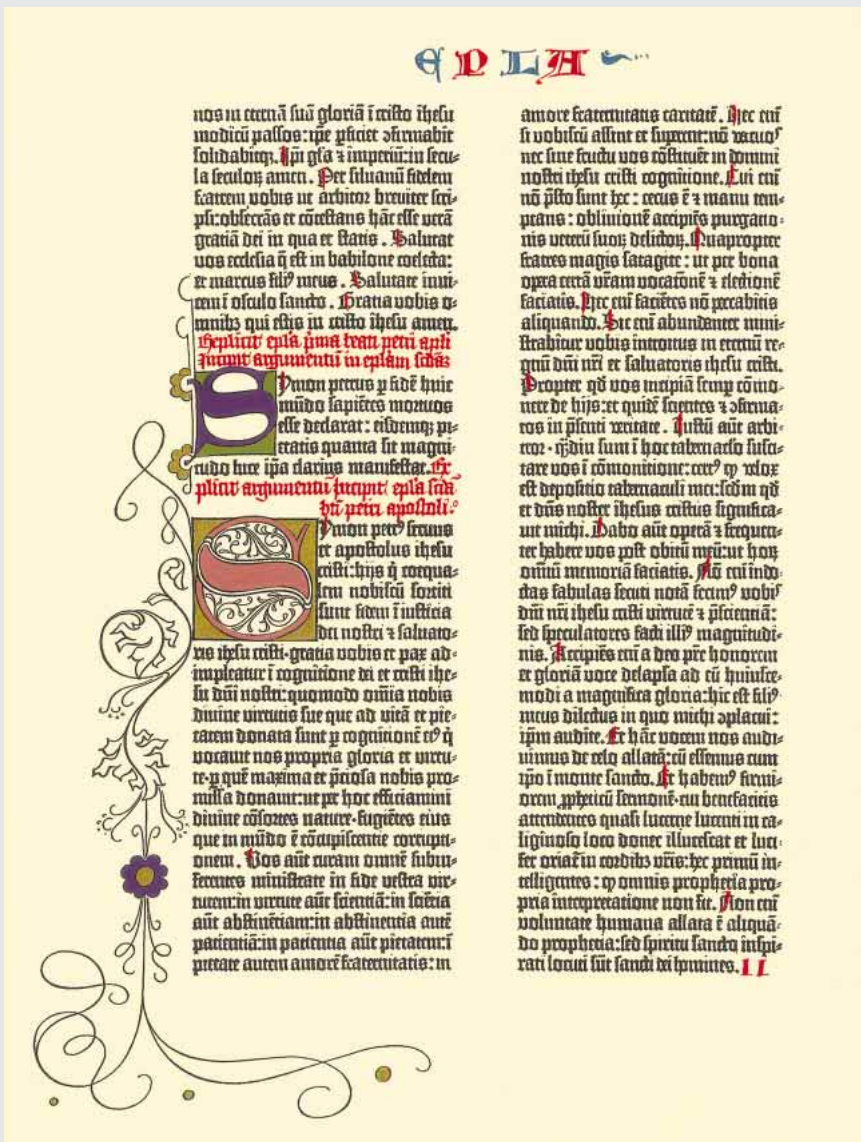
当社は、軽印刷業からスタートした会社であり、終戦後、謄写印刷を始めた。昭和二十二年である。当時、宮沢賢治も早稲田大学の前でガリ版屋でアルバイトをしたと、ある本で読んだ事がある。物の無い、日本全土が復興をめざし、躍動を始めた時でもあったと記憶している。数年後、孔版タイプ時代を迎え、タイプライターで原紙に孔をあけ、インキを通して紙にのせる印刷方法である。これが、クライアントのニーズに合ったため需要も多く、少数で早くより安く出来る事が受けたのだと思う。孔を通して印刷するため、美しい印刷には適さないとされ、よりきれいにす

るためにインクを通すのではなく光を通してオフセット印刷しては、となり、これが写真文字とも非常にきれいな印刷物となったのである。しかし、経済が安定し印刷物も文字の形や種類にきびしくなってきたので、写真植字による組版を取り入れて顧客の満足度に全力で投入した。

一九七六年、山形県で初めての電算写植を導入したのである。電算機だから、魔法の機械と考えたのが大きな誤算であった。それから真剣に取り組み、どうにか使えるようになった。従来の組版が大きく変化し、よりきれいになり、早くクライアントのニーズに添えるようにと努力したがいがあり、現在のD・T・Pにすばやく取り組む事が出来た。

ところが、デジタルについてアメリカでは一九九二年に発表され、日本には翌年から入ってきた。当時、デジタルとは何かも知らないでいるうちにマッキントッシュが導入さ

# Value Sight 印刷



れ、約半年間、仕事にならない仕事をさせていた。

一九九四年からマッキントッシュによるデジタルで文字、画像を処理するようになり、出力についてはドイツのライノヘル社のハークユレスで出力する。日本語をアメリカのマッキントッシュで入力、写真については日本のものを使い、フィルム出力にはドイツの機械で出力するため、文字が変わる（専門的には文字化けと呼んでいる）。これには苦労させられた。こうして印刷産業は知的産業に変

貌していき、作業場はコンピューター一色に変わり、活字の無い印刷産業となった。今後は、規制緩和により産業区分が無くなり、どう変わっていくのか頭を痛めているところである。

今後、印刷産業は、進行管理の徹底、デジタルワークフローの構築、カラーマネージメントへの取り組み、特に基幹ソフトウェア＋バージョンアップ等によってスピーディーに行なえる努力をし、品質の基本である「色」に注意し、デジタルデータをフィルムを通さ

## 大風 茂吉

株式会社大風印刷 代表取締役

1937年11月15日生まれ。山形市緑町。

昭和22年大風謄写堂開業。昭和41年先代社長死去後、大風茂吉を襲名、代表取締役に就任。昭和46年山形市あこや町に本社移転。昭和53年山形県初の電算写植機導入。昭和54年コピントショップ開設。昭和59年カラスキャナを含め、製版機器の整備と4色印刷機導入。平成元年タイプライターに変わる、DTPシステムの設置。平成5年マッキントッシュによるDTPシステムの設置。平成9年山形市蔵王松ヶ丘蔵王産業団地内に本社移転。平成10年CTP（コンピュータ・トゥ・プレート）の導入。現在山形県印刷工業組合専務理事、日本グラフィックサービス工業会山形県支部長。

ず刷版に流れるようなCTP（コンピュータ・トゥー・プレート）でより安定した印刷物が出るように、また、同時に刷版の検版方法、さらにプリプレスシステムのデータ形式の標準化を構築しなければならぬ。今後はネットワーク化を計り、スタジオ、デザイン、プログラミングと連携を持ちながら、進んで行かねばと思う。こうした印刷産業の激動の中で、当社は常に、会社は社員の家業繁栄のためにあるのであると共に、少しでも社会のために役立ち、クライアントのニーズにこたえ、喜ばれ、感謝され、次に選ばれるようにならなければならぬと思つてやってきた。さらに信頼関係を持つため、誠意を持っていかなるニーズにもこたえられるよう努力するとともに、短納期・高品質・多種少量に喜びあえる特徴のある会社になっていきたい。